

宋代文人の富貴觀

——龍涎香の愛好を中心に——

坂井 多穂子

はじめに

南宋を代表する詩人、楊萬里（一一二七—一二〇六）に、咲き初めし木犀の芳香を詠った七律があり、尾聯に、

詩情惱得渾無那

詩情 惱まし得たるも 渾て那^{いか}んともする無し

不爲龍涎與水沈

龍涎と水沈とが爲ならず

（楊萬里「木犀初發呈張功父」『全宋詩』卷二二九七）

という。「詩情」、すなわち詩を作りたいという気持ちが高ぶってどうしようもないが、それは木犀の花の香りのせいであって、龍涎香や沈香によるものではない、という主旨になろう。木犀の芳香を主題とするこの詩に、なぜわ

ざわざ龍涎香や沈香が登場し、木犀の引き立て役を演じさせられたのかといえ、當時の實態としては、むしろこの二つの香こそが、宋代文人の「詩情」を掻き立ててきた高貴な香の主役と見なされていたからに他ならない。本稿では、楊萬里のこの詩句が示唆する内容に導かれつつ、宋代文人が珍重した二つの香、とくに龍涎香に焦點を當て、文人と香の關わりについて考察する。

ところで、近年の研究^{*1}によれば、宋代における龍涎香と沈香は、愛好した階層や身分が異なっていた、という。すなわち、前者を愛好したのは皇族たちであり、文人は主として後者を愛好した、という。いうまでもなく、この相違は、龍涎香がより希少で高價であったことに起因するであろう。とはいえ、冒頭の楊萬里の詩句に明らかなように、龍涎香が當時の文人たちにまったく手の届かない高嶺の花であったわけでもなかった。時代は下るが、清供の品々を記録した、明の文震亨『長物志』（卷十二「香茗」）にも、龍涎香は「伽羅」に次ぐ二番目に記載されており（沈香は三番目）、遅くとも明代には文人の「長物」^{すぐれもの}として、すでに確固たる地位を築いている。

では、龍涎香は如何に宋代文人の「詩情」を掻き立てたのであろうか。黃庭堅や蘇軾を始め、個別の文人と香全般についての先行研究^{*2}は散見するが、特定の香、とくに龍涎香の受容について、宋代文人全體に調査對象を廣げて論じた研究は、管見の限りでは未だ見られない。本稿では、龍涎香が宋代文人の日常生活にどのように取り入れられ普遍化していったのかという問題を、適宜、沈香の場合と比較しつつ、明らかにしたい。

一 香譜類における龍涎香

龍涎香はマッコウクジラの體内の結石と言われ、動物由來の香である。「龍の涎」という神話めいた名稱は、從來、

九世紀半ばから十世紀はじめ（唐末から五代十國）にかけて誕生したという説^{*3}が有力であるので、中國傳來もこの頃であろうか。一方、沈香が中國にもたらされたのは後漢の頃と推測される^{*4}から、龍涎香の傳來は沈香に比べかなり遅い。北宋の蔡條『鉄園山叢談』卷五^{*5}に、龍涎香に關わる次のような逸話が見える。

奉宸庫者、祖宗之珍藏也。政和四年、太上始自攬權綱、不欲付諸臣下、因踵藝祖故事、檢察內諸司。（中略）時於奉宸中得龍涎香二、琉璃缶・玻璃母二大簍。（中略）香則多分賜大臣近侍、其模製甚大而質古、外視不大佳。每以一豆火爇之、輒作異花氣、芬郁滿座、終日略不歇。於是太上大奇之、命籍被賜者、隨數多寡、復收取以歸中禁、因號曰「古龍涎」。爲貴也、諸大璫爭取一餅、可直百緡、金玉穴、而以青絲貫之、佩於頸、時於衣領間摩挲以相示、坐此遂作佩香焉。今佩香、因古龍涎始也。

奉宸庫なる者は、祖宗の珍藏なり。政和四年、太上始めて自ら權綱を攬り、諸^こを臣下に付すを欲せず、因りて藝祖の故事を踵ぎて、内諸司を檢察す。（中略）時に奉宸中に於いて龍涎香二、琉璃缶・玻璃母二大簍を得たり。（中略）香は則ち多く大臣近侍に分賜するも、其の模製甚だ大にして質古く、外視大いには佳からず。一豆火を以て之を爇するごとに、輒ち異花の氣を作し、芬郁座に滿ち、終日略ほ歇きず。是に於いて太上下いに之を奇とし、命じて賜はるる者を籍し、數の多寡に隨ひて、復た收取して以て中禁に歸せしめ、因りて號して「古龍涎」と曰ふ。貴と爲るや、諸大璫争ひて一餅を取り、百緡に直^{あた}るべし、金玉に穴し、而して青絲を以て之を貫き、頸に佩び、時に衣領の間に摩挲して以て相ひ示し、此に坐^よつて遂に佩香と作る。今の佩香は、古龍涎に因りて始まる。

北宋徽宗の政和四年（一一一四）、宮中の寶物藏で「古龍涎」が発見され、珍重された様子を描く。徽宗が太祖にならって内侍省を視察した折に、古い龍涎香の大塊二つを発見し、臣下に分け與えた。見た目は醜いものの、小火であたためると、「異花の氣」を發し、「芬郁」たる芳香が座に滿ちて終日消えることがなかった。その價值に氣づいた徽宗は一度は分賜した香を數量に應じて一部を回收し、「古龍涎」と名づけた。少量でも百緡の價值があるとして臣下の間で奪い合いとなり、金や玉に穴をあけて（はめ込み？）青い絹絲を通して頸に下げ、襟の間にのぞかせて時折それを撫でさすった。佩香の由來はこの古龍涎の故事に始まる、という。

この故事からは、古龍涎の値（一餅あたり百緡）と、その香りが如何なるものであつたかがわかる。まず當時の香の値について言えば、香の「宗」*6として貴ばれた沈香の場合、

占城チャンパ所產棧沈至多、彼方貿遷、或入番禺、或入大食。貴重沈棧香與黃金同價。

占城（ベトナム中部）に産する所の棧沈（棧）も沈香の一種）至って多く、彼方に貿遷し、或ひは番禺（廣州の南）に入り、或ひは大食（アラビア）に入る。沈棧香を貴重すること黄金と價を同じうす。

というように、黄金と同價とされた。舶來の香は龍涎香も沈香も高値で取引された。とはいえ、北宋の江西詩派の一人で、不遇のまま生涯を終えた謝逸*7（一〇六八―一一二二）ですら、人（呂本中）に高價な沈香を贈ることができた*8のだから、沈香がこの頃には一部の貴族や富豪の専有物ではなくなり、文人間に一定程度流通していたことは確かであろう。

他方、北宋後期の徽宗の宮廷で奪い合いとなった古龍涎には、沈香以上の希少性があつた。山田憲太郎氏*9に

よれば、『宋會要』「市舶」の、南宋初期・紹興三年（一一三三）と同十一年（一一四一）の記録の中に、行在に送付せねばならない輸入品として龍涎香も含まれており、「當時はすこぶる貴重高價な輸入品」とされていた、という。『鉄圍山叢談』では、古龍涎を焚くと、「芬郁」たる「異花の氣」（珍しい花の香り）を放つと形容されているが、山田氏^{*10}によれば、アンバル（龍涎香）の香りは「快適で強力な匂いを放ち、粘つくていつまでも消えない（長つづきのする）甘美な匂い」をもつラブダナム（山羊の分泌物の香り）に似ており、それを「より強く濃厚にしたもの」であるという。同じ動物性の香である麝香に近い香りであろうか。

だが、南宋當時の南海貿易に關わる諸國について記した地理書や香の譜録類では、『鉄圍山叢談』とはいささか異なる記述が見える。まず、前者の例として南宋の周去非（一一三五～八九）『嶺外代答』「寶貨門」の「龍涎」^{*11}を見てみる。この書において、龍涎香は、「香門」^{*12}ではなく、「寶貨門」に、珠池・蛇珠・辟塵犀・琥珀・硨磲・大貝とともに收録されている（ともに卷七）。この分類は當時、龍涎香が「香」というよりも、「寶貨」（寶物）と見なされていたことを示しているが、それはおそらく、龍涎香が竝外れて高價であつたためと、周去非が「香門」には香木のみを収める方針を採っていたためであろう。焚いた時の香りについて、『嶺外代答』では次のように述べている。

龍涎於香本無損益、但能聚烟耳。和香而用眞龍涎、焚之一鉢、翠烟浮空、結而不散、座客可用一翦分烟縷。此其所以然者、蜃氣樓臺之餘烈也。

龍涎の香に於けるや本と損益無く、但だ能く烟を聚むのみ。香を和して眞龍涎を用ふれば、之を焚くこと一鉢にして、翠烟空に浮き、結びて散ぜず、座客一翦を用て烟縷に分かつべし。此れ其の然る所以の者は、蜃氣

樓臺の餘烈なり。

龍涎香はそのままの状態では芳香は放たない。龍涎香を配合した合香を焚くと、煙が廣がらず、缺で切ることができた。香氣を散らさず「餘烈」を長續きさせるための薬剤として配合された、という。

つづいて、南宋末元初の人・陳敬『陳氏香譜』を見てみる。この書は、香に關する諸賦^{*13}を吸収して編まれた、いわば宋代香譜の集大成といふべき書である。卷一「香品・龍涎香」の條には、南宋の葉庭珪『南蕃香錄』と、潛齋^{*14}、溫子皮^{*15}の三者のことが列記され、陳敬自身の見解は含まれない。全文を掲げる。

葉庭珪云、「龍涎、出大食國、其龍多蟠伏於洋中之大石、臥而吐涎、涎浮水面。人見烏林上異禽翔集、衆魚游泳爭嗜之、則受取焉。然龍涎本無香、其氣近于臊、白者如百藥煎而膩理、黑者亞之、如五靈脂而光澤、能發衆香、故多用之、以和香焉。潛齋云、「龍涎如膠、每兩與金等、舟人得之則巨富矣。」溫子皮云、「眞龍涎、燒之、置杯水于側、則烟入水、假者則散、嘗試之有驗。」

葉庭珪云ふ、「龍涎、大食國より出づ、其の龍多く洋中の大石に蟠伏し、臥して涎を吐き、涎水面に浮く。人烏林上に異禽の翔集するを見るに、衆魚游泳して争ひて之を嗜み、則ち受もて焉を取る。然るに龍涎は本と香無く、其の氣は臊きに近し、白き者は百藥煎の如くして膩理あり、黒き者は之に亞ぎ、五靈脂の如くして光澤あり、能く衆香を發く、故に多く之を用ひ、以て香を和す。潛齋云ふ、「龍涎は膠の如し、每兩金と等し、舟人之を得ば則ち巨富あらん」と。溫子皮云ふ、「眞龍涎、之を燒き、杯水を側に置けば、則ち烟水に入る、假なる者は則ち散ず、嘗て之を試みて驗有り」と。

香りについての記述をまとめると、葉庭珪は、「そのままだと香りはなく、その氣はややなまぐさい。（中略）他の香の香りをひらかせるので、龍涎香を用いて合香する」といい、潛齋は「膠のようなもの」といい、溫子皮は「真龍涎を焚いた側に杯の水を置くと煙が水に入る」という。そのままの状態では芳香を發さないことと、ほかの香料の香りを發揮させる藥劑として用いたこと、この二點は前出の『嶺外代答』と同内容である。とはいえ、龍涎香を配合することによって香煙が長續きし、缺で斷ち切れることについて、山田氏は、「奇妙な話」で「誇張」であるとして疑念を呈している。

ここで葉庭珪が「本無香」とのみいい、焚香時の「異花氣」について触れないのは、龍涎香の香氣を嗅いだことがないからではないか。彼は「古龍涎」發見の翌年、政和五年（一一一五）の進士である。後には兵部郎中（從五品上）にまで昇ったのだから、宮中で「古龍涎」の實物を首から下げた高官や宦官に會った可能性もある。「其氣近于臊」は佩香を嗅いだ彼の實體験かもしれない。「古龍涎」は小火で焚いてはじめて馥郁たる香りを發し、焚かなければ香りを發することはない。葉庭珪が「古龍涎」の佩香を目にしたとしても、頸から下げた「古龍涎」が「異花氣」を發することはないから、彼が「本無香」としか書きようがないのもうなずける。

それに對し、『鉄圍山叢談』の撰者蔡條（生卒不詳）は、宰相蔡京の子である。「古龍涎」が發見された政和四年（一一一四）、父は宰相として權勢をふるっていたので、徽宗から「古龍涎」を下賜された一人であつたに違いない。子の蔡條も、父の焚く「古龍涎」の芳香を聞いたのではないだろうか。

二 香料と合香

二一 沈香の場合

本章では、引き續き、『陳氏香譜』をとりあげ、宋代文人の日常における香の使用法をさぐりたい。

まず、沈香の使用法を整理しておく。沈香は、香木（本論では、香料と稱する）を焚く「焚香」が主流であったが、「種種の香料を適當量、配剤調合して、實際に使用する香料（匂い）を作る技術」*¹⁶である合香もあった。合香の形状には大別して、粉末状のものと、それを加工した煉香の二種がある。合香に用いられる香料を確認したところ、多くの場合、沈香（や棧香・黄熟香等）を香材の主香とするものが多い。沈香は單品で焚く香料として主流であったばかりでなく、合香においても香りの基盤を構成する主香であった。沈香が主香とされたのは、宋代文人たち*¹⁷が「清淑」（范成大）、「清婉」（陳敬）、「清」（『諸蕃志』）と述べるように、沈香には文人の好む清淨な香りがあることと、さらに、蘇軾*¹⁸が述べるように、「近正」（純正に近い）なる香りを持ち、薰り高い花を配合するのに適したためである。

合香のなかには時間と手間を費やすものも多い。たとえば、「江南李主帳中香」は、

沈香一兩（剉細如炷大）、蘇合香（以不津瓷器盛）、以香投油、封浸百日、薰之。入薔薇水更佳。

沈香一兩（剉細すること炷の如き大いさなり）、蘇合香（不津瓷器を以て盛る）、香を以て油に投じ、封浸すること百日、之を薰す。薔薇水を入れれば更に佳し。

（陳敬『陳氏香譜』卷二「江南李主帳中香」）

というように、沈香と蘇合香とを油に浸し、百日間、封印し、薔薇水を加えてようやく完成する代物であった。「江南李主帳中香」は南唐後主の李煜（九三七～九七八）をイメージした香である。李煜の詞には香を詠み込んだ作品が多く、宮中で香宴を開くなどして、香を愛用した。嚴小青氏^{*19}によれば、「帳中香」の調合には、沈香・檀香・龍腦香・丁香・零陵香・甲香・麝香・蘇合香・薔薇水の配合が缺かせないというから、右の製法で原料が三種のみなのは少ない方である。合香には多様な香料と複雑な工程を必要とするため、五世紀から六世紀にはすでに、合香を専門とする合香家が存在していた^{*20}。「江南李主帳中香」以上の手間や時間を必要とする合香も多い。まるで、のちの『紅樓夢』（第四十一回）に描かれる、尼僧の妙玉が梅の花に積もった雪を甕に集めて、五年寝かせた水で煎れた茶を髣髴とさせる。宮崎市定^{*21}は、宋代における奢侈は、「科學的知識の進歩」によって、物の性質を見きわめ、「その性質と性質を組み合わせて人間に必要な物を造」っていく「合理的」なものである、と指摘する。合香においては最高の香りを生み出すために、「科學的」な裏づけに基づく工夫を凝らし、労力を惜しまない。合香は、香料の香りを最大限に引き出すのに必要な手法を合理的に究めたものと見なされていた。

二二二 龍涎香の場合

陳敬の『陳氏香譜』卷二には、「龍涎香」という名の合香が、じつに二十四種^{*22}も挙げられている。そしてその二十四種のうち、本物の龍涎香を配合した合香「龍涎香」は、二種しかない。つまり、合香「龍涎香」の大半は、原料に龍涎香を含まない。龍涎香を使わずに、龍涎香の香り（らしきもの）を再現したのである。そのひとつをみてみよう。

「龍涎香」

沈香一斤、麝香五錢、龍腦二錢

右以沈香爲末、用水碾成膏。麝爲湯、研化細汁入膏内、次入龍腦研勻、捻作餅子、燒之。

右沈香を以て末と爲し、水を用い碾ひきて膏と成す。麝は湯と爲し、研ぎて細汁と化し膏内に入る。次いで龍腦を入れて研ぎ、勻ととのえ捻りて餅子を作し、之を焼く。

「一斤」という分量から、沈香が主香であることが分かる。麝香を加えることで、ムスク系の濃厚で甘美な香りをつけている。龍腦は龍腦樹の樹脂で、樟腦に似た香りをもつ。その他の合香「龍涎香」においても、他に加える香料の種類や分量に違いはあるが、少なくとも沈香・麝香・龍腦の三種の香料は配合されている。この三種によって、龍涎香らしい香りが再現できると考えられていたのだろう。

宋代文人が言う「龍涎香」には、大別して、香料としての龍涎香（アンバル）と、合香「龍涎香」の二種類が存在することになる^{*23}。これは、合香のなかでもかなり特殊な状況である。『陳氏香譜』記載の合香には、原則的に、「江南李主帳中香」のように香の雰囲気や由来を想像できる名稱か、あるいは「百和香」のように明らかにそれが合香であることが一目瞭然な名稱がつけられている。香料をそのまま合香の名稱とするような紛らわしいことは原則にない^{*24}。たとえば「沈香」という名の合香はないのである。「龍涎香」という名の合香が多く作られた所以は、龍涎香が寶物並みに高價で、入手が困難であるためであろうが、宋代文人の龍涎香への憧憬をそこに見てとることができる。宮中に秘藏される高貴な香に對する憧憬が、二十四種もの合香「龍涎香」を作らせる原動力になったと思われる。

ともあれ、「龍涎香」という名稱だけでは、それが合香なのか香料なのかを判別しがたいのは事實である。とくに詩の場合、どちらを指すのか明記されていないことが多い。よって、詩中の龍涎香には二種類の可能性があることを念頭に置いて読む必要がある。次章では、『全宋詩』における龍涎香を、沈香と比較しつつ見てゆくことにする。

三 宋詩のなかの龍涎香

宋代の文人は、龍涎香をどのように詩歌のなかに詠みこんでいるのか。本章では、沈香と比較しつつ分析したい。『全宋詩』にみえる龍涎香と沈香の用例のなかで、詩題に「龍涎香」あるいは「沈香」の語がある詩例のみを表に載せる。句中に語がある詩例は枚舉にいとまがないため、表には載せない。また、沈香の等級別名稱には、沈水香、棧香、黄熟香、熟結香、生結香等があるため、實際の用例数はさらに増えると思われる。

【表】宋詩の用例一覧

		龍涎香 12 例 17 首	沈香 14 例 23 首
北 宋			01 梅堯臣 1002-1060 「湯珙秘校遺沈水管筆一枝」(256)
			02 李中師 ?-? 「奉別堯夫先生承見留學數刻北濱梅酒磨沈水飲別聊書代謝」(401)
			03 沈遼 1032-1085 「以沈香拄杖奉寄總老戲呈句偈」(701)
			04 蘇軾 1037-1101 「次韻滕大夫三首其三沈香宋石」(820)
			05 李之儀 1038-1117 「次韻東坡沈香石詩」(953)
			06 謝逸 1068-1112 「以水沈香寄呂居仁戲作六言二首」(1307)
南 宋	01	王庭珪 1080-1172 「次韻李宜仲以詩寄龍涎三首」(1475)	07 周紫芝 1082-1155 「劉文卿燒木犀沈爲作長句」(1520)
	02	曾幾 1084-1166 「廣南韓公舶使致龍涎香三種數珠一串戲贈(二首)」(1658)	
	03	劉才邵 1086-1157 「謝人惠花栽以龍涎及小園答之」(1682)	
	04	王洋 1087-1154 「龍涎香」(1690)	08 謝伋 1099-1165 「靈巖寂菴辯才師有羅漢樹一株移自台嶽託根木香架下頗妨成長因寄沈水香往易之」(1948)
	05	劉子翬 1101-1147 「蓮老寄龍涎香二首」(1921)	
	06	姜特立 1125-1204? 「覓龍涎巧石」(2132)	09 楊萬里 「和仲良分送柚花沈三首」(2275)
	07	楊萬里 1127-1206 「謝胡子遠郎中惠蒲大韶墨以龍涎心字香」(2293)	10 楊萬里 「南海陶令送水沈報以雙井茶二首」(2294)
	08	喻良能 ?-? 「陳知府體仁和予七夕試院詩併以龍涎數十餅爲餉次韻奉酬陳每講會甚盛」(2350)	11 虞儔 ?-? 「以蘄簾石枕送耘老弟有詩因和來韻併分送蒸沈以助其雅趣」(2465)
	09	曾丰 1142-1224 「除日送龍涎香與宋評事二首」(2602)	12 趙汝鎰 ?-? 「謝人送端硯水沈」(2869)
	10	楊炎正 1145-? 「蓮老寄龍涎香」(2649)	13 方信孺 1177-1222 「沈香浦」(2914)
	11	方岳 1199-1262 「葉祕書致白龍涎」(3209)	14 程公許 ?-1251 「和虞使君擷素馨花遺張立蒸沈香四絕句」(2993)
	12	姚勉 1216-1262 「梁新恩送龍涎香盃」(3406)	

※ 各用例は、詩人名→生卒年→詩題→(『全宋詩』の巻数)の順に表記した。

一覽して分かるように、沈香の詩は北宋・南宋を通して存在するが、龍涎香の詩は南宋に入ってから出現した。これは、前出の『鉄圍山叢談』や『宋會要』「市舶」の記述から考えれば當然のことではある。

また、詩題から分かったとおり、どちらの香においても、贈答のやりとりを記した用例が大半である^{*25}。これらは、高價な香の授受が實際に文人間で行われ、日常生活のなかで香が使用されていたことを裏づける證據である。とくに沈香は、宋代を通してひろく授受がおこなわれており、すでに文人の「長物」の一つとして定着していたことが見てとれる。

このほか、詩句レベルでは、たとえば蘇過（蘇軾の子。一〇七二—一一二三）が「待我西窗蔭寒碧、妙香與子試龍涎」（「信中見和復以前韻答之」『全宋詩』卷一三五三）と詠うように、龍涎香の所有を示唆するものは北宋にも見られる。だが、北宋詩の龍涎香の大半は、「竹筴迸階抽兕角、楊花鋪水漲龍涎」（韓琦「二〇〇八—七五」）「暮春書事」『全宋詩』卷三三六）のように、花の芳香を龍涎香になぞらえた比喻表現にとどまり、所有の如何を確認できない。

香料の龍涎香の稀少性が續いていたにもかかわらず、南宋詩に龍涎香の贈答が増えた要因としては、合香「龍涎香」の普及が考えられる。詩中の龍涎香が合香かどうかを判断する前に、まず、本物²⁶すなわち香料の龍涎香がこれらの詩の中にあるのか否かを確認しておきたい。

本物²⁶とおぼしきは、曾幾の詩である。「廣南韓公舶使致龍涎香三種數珠一串戲贈」（二首。『全宋詩』卷一六五八）という詩題にみえるように、「廣南舶使」の韓圭璉から龍涎香を寄せられた折の詩である。「廣南舶使」は廣南東路提舉市舶司のことで、『宋會要』卷二二四「職官」四十四之三十三に、「泉・廣市舶司將逐年博買蕃商乳香」^{*26}というように、南蕃の商人から乳香の買い付けをおこなう役職である。その舶司の韓圭璉から直々に寄

せられた龍涎香であるから、〴〵本物に違いない。詩の内容は、江南の陸凱から長安の范曄に梅花一枝が寄せられた故事を引き合いに出して、「龍涎走送寒家」と謝意を述べる。高級な龍涎香をむやみに焚くことを躊躇ったからか、「貫珠入手疊疊」と、香の形状を描くにとどまり、焚香の描寫はない。とはいえ、曾幾詩のように判別可能な詩例はほとんどなく、どちらともつかないもののほうが多い。

ではつぎに、合香とおぼしき例をあげる。たとえば、劉才邵（一〇八六―一一五七）の「謝人惠花栽以龍涎及小團答之」（『全宋詩』卷一六八二）は、人から花の「靈苗四五般」をもらった禮を、「俗物」で返すわけにはいかないので、「龍涎」と「小團」（茶葉）を贈ると詠う詩である。詩の後半に、

鯨波薦液香難比　　鯨波　薦液　香比べ難し

龍焙先春玉作團　　龍焙　春に先んじて　玉　團と作る

寄與文房助清興　　寄せて文房に與えて　清興を助けん

詩魂莫怕月邊寒　　詩魂　怕るる莫かれ　月邊の寒

「鯨波」（龍涎香）と「薦液」（茶）はどちらの「香」りも素晴らしく優劣をつけがたいので、二つとも差し上げてあなたの書齋（文房）の「清興」（清雅な興致）を助けたい、と詠う。「鯨波」「龍焙」は龍涎香を指すが、これだけでは〴〵本物の龍涎香だとは言えない。むしろ、もし〴〵本物なら曾幾詩でははるばる廣南舶使から贈られたような高級品を、劉才邵は茶と併せて「花栽」の返禮としたことになり、龍涎香の扱いが低すぎるように思える。よって劉才邵詩の龍涎香は合香である可能性が高い。

ほかに、楊萬里が胡子遠に四川の名墨「蒲大韶墨」を貰ったお返しに贈った「龍涎心字香」（謝胡子遠郎中惠

蒲大韶墨以龍涎心字香」『全宋詩』卷二二九三）は、「心字香」が篆書の「心」の字形に成形された香をいうから、合香である。また、喻良能（『全宋詩』卷二三三〇）は、「陳知府體仁」から「龍涎數十餅」を贈られているが、その量の多さからして、本物の龍涎香ではあり得ないだろう。

表の作品のうち、香を贈答しない詩について触れておきたい。龍涎香については、王洋「龍涎香」詩（『全宋詩』卷一六九〇）があり、沈香については蘇軾「次韻滕大夫三首 其三 沈香石」（『全宋詩』卷八二〇）と李之儀「次韻東坡沈香石詩」（『全宋詩』卷九五三）がある（「沈香石」は沈香の化石をいう）。いずれも詠物詩（李之儀は次韻詩）であり、後述するように、「焚香」を詠う詩ではない。以下、三首を併せて見てゆきたい。詠物表現としては、沈香石を詠った二首のそれぞれ首聯にみえる。いわく、

壁立孤峰倚硯長 壁立せる孤峰 硯に倚りて長し

共疑沈水得頑蒼 共に疑ふ 沈水頑蒼を得たるかと

（蘇軾「次韻滕大夫三首 其三 沈香石」）

海南枯朽挿天長 海南の枯朽 天を挿して長し

歲久峰巒帶蘚蒼 歲久しく峰巒 蘚を帯びて蒼し

（李之儀「次韻東坡沈香石詩」）

と、苔の生えた「沈香石」の屹立する様を描く。李之儀は蘇軾と交流があったから、その場に居合わせて見た實景

かもしれない。王洋「龍涎香」詩には詠物表現は乏しい。また、『楚辭』をふまえた表現が次の二首にみられる。

寒露紉荷楚澤舩

露を牽り荷を紉^{むす}ぶ 楚澤の舩

未參南海素馨仙

未だ參ぜず 南海 素馨の仙

(王洋「龍涎香」)

欲隨楚客紉蘭佩

楚客の蘭佩を紉ぶに隨はんと欲するも

誰信吳兒是木腸

誰か信ぜん 吳兒は是れ木腸なるを

(蘇軾「次韻滕大夫三首 其三 沈香石」)

いずれも『楚辭』『離騷』にみえる「紉秋蘭以爲佩」を出典とする。『楚辭』は香りを描いた最古の文學作品であるから、それを踏まえるのは香の描寫の定型である。とはいえ、龍涎香は、王洋が「未參南海素馨仙」と詠うように、その芳香を放っていないし、また、「沈香石」は沈香の化石であって香木そのものではない。總じて三首には香りの描寫が乏しいのである。焚香らしき描寫としては、蘇軾詩の尾聯の、

早知百和俱灰燼

早に知る百和の俱に灰燼せるを

未信人言弱勝剛

未だ信ぜず人弱の剛に勝れりと言ふを

(蘇軾「次韻滕大夫三首 其三 沈香石」)

という表現のみであるが、これも香りには全く触れていない。沈香が「百和」（様々な香料を調合した「百和香」）の主香として燃やしつくされ灰になることに着目する。ここでの沈香は、「灰燼」に帰す「弱」いものの象徴である。宋詩では往々にして、詠物表現をきっかけとして詩人の哲學が展開されるが、この詩もご多分に漏れず、「柔弱は剛強に勝る」（『老子』）ということばへの疑念を導き出している。

王洋「龍涎香」詩の詠物表現はさらに乏しい。王洋は龍涎香を嗅いでいない（「未參」）ばかりか、見てもいないのではない。頸聯に、

詩挾少陵看妙手

詩は少陵を挟みて 妙手を見る

犀通神物爲垂涎

犀は神物に通じて 垂涎と爲る

（王洋「龍涎香」）

というのは、「詩」（文學）の高度な成就と、龍涎香の造成とを對比させていよう。「犀通神物」は、『晉書』「溫嶠傳」の、溫嶠が牛渚磯で犀角を燃やして水に照らすと、「奇形異狀、或乘馬車著赤衣者」など水中に潜む怪物が見えたという故事を踏まえる。ここでは龍涎香の由來を神秘的に説く。ともあれ、この「龍涎香」詩は、その「外視不大佳」（『鐵園山叢談』、前出）なる外見や香りをほとんど詠わない。作詩時の状況は不明だが、尾聯に「使君少住幽蘭曲」と詠っているから、宴席にて「使君」（長官）に求められて制作したものではないだろうか。

以上のように、沈香や龍涎香の詠物詩は、文人の日常をいろどる焚香の場面の描寫に乏しい。『楚辭』をふまえた描寫はみえるが、焚香の實景ではない。「百和香」の主香である沈香や、神秘的な由來を持つ龍涎香という物

を詠ずることに主眼が置かれているためであらうか。

話を贈答詩に戻そう。龍涎香を贈答する詩が南宋に集中して現れるのは、南宋文人に龍涎香が廣まったというよりは、正確には、「龍涎香」という名の合香が南宋の文人の間に廣まったことを示していよう。徽宗の寵愛した龍涎香の香りを、沈香等を用いて再現し、「清興」（劉才邵詩。前出）や「詩情」（楊萬里詩。前出）を助けて楽しまんとしたのである。

四 楊萬里と龍涎香

ではその合香「龍涎香」は、文人のもっとも好む香りであったのだろうか。文人の好む沈香を主香としている以上、「清婉」「清淑」たる香りから外れてはいないはずである。ここで、前出の表には載っていないが、楊萬里の「焼香七言」を取り上げたい。

楊萬里「焼香七言」（『全宋詩』卷二二八二）

琢瓷作鼎碧於水 瓷を琢みきて鼎と作さば 水よりも碧し

削銀爲葉輕如紙 銀を削りて葉と爲さば 輕きこと紙の如し

不文不武火力勻 文ぶんならず武ぶならず 火力くわ勻ふ

閉閣下簾風不起 閣を閉ぢ 簾を下せば 風起ふうこらず

詩人自炷古龍涎

詩人 自ら古龍涎を炷けば

但令有香不見煙

但だ香有るのみにして 煙を見えざらしむ

素馨忽開抹利拆

素馨 忽ち開きて 抹利 拆く

低處龍麝和沈檀

低き處 龍麝 沈檀に和す

平生飽識山林味

平生 飽くまで識る 山林の味

不奈此香殊嫵媚

奈ともせず 此の香 殊に嫵媚なるを

呼兒急取烝木屋

兒を呼び急ぎ取らしむ 烝木屋

却作書生真富貴

却て作す 書生の眞の富貴

香を焚く準備から詠い起こし、火加減や部屋の戸締まりなど、焚香の注意点を列挙するような詩である。ただ、この詩の特徴は、「古龍涎」だけでなく「素馨」「抹利」「龍麝」「沈檀」など、舶來の名香や芳しい花が列挙される点にある。この「古龍涎」は合香で、「素馨」「抹利」「龍麝」「沈檀」は配合された香料であろう。楊萬里は「古龍涎」を焚いて、配合された香料を次々に嗅ぎわけている。そして、日頃は「山林の味」に慣れ親しんでいたため、「此の香 殊に嫵媚」と、「古龍涎」の華やかすぎる香りに違和感を覚えて焚くのをやめ、代わりに急いで烝木屋を取ってこさせた。烝木屋を焚いてようやく落ち着き、「書生の眞の富貴」と満足するのである。舶來の名香よりも國産の木犀の香りに価値を見いだし、積極的に選び取る。楊萬里は烝木屋の香りについて（「清」等の）感想を述べることなく、「書生真富貴」（木犀の香りにこそ文人の眞の富貴がある）とのみ結論づける。文人にとって香とは何かの楊萬里なりの結論である。この結論は暗に、この古龍涎は「書生真富貴」ではない、と言うに等しい。おそらく

楊萬里は、古龍涎が本来、徽宗に由來する「皇室富貴」の香であることを念頭に置いている。『本物』の龍涎香ではないが、沈香やその他の多種の香料を配合した「嫵媚」な香りは、「富貴」を連想させるものであったろう。

では、蒸木屋はいかなる香なのか。蒸木屋について、『山家清供』『廣寒糕（もくせい）の花の蒸し菓子』^{*27}に、つぎのような解説がある。「また、桂花を採つてざつと蒸し、日に乾かして香にする者もいる。詩を吟じ酒を酌むおりに古鼎で燻べると、なかなか清らかな趣がある。童用珣の詩に、「膽瓶の清韻は詩興をかきおこし、古鼎の余葩は酒香をくまどる」とあるのは、この花の風趣をよくいい得ている」（中村喬訳『中國の食譜』東洋文庫）。楊萬里は「山林味」と言うが、木屋の「清らかな趣」が感じられる香であろう。

楊萬里は、「木屋」の清らかな趣の「山林味」に、「書生真富貴」を見いだした。文人の好む香りは「清」であるから、「嫵媚」なる古龍涎はお氣に召さなかったのだろう。とはいえ、舶來の高價な香料を調合した「富貴」なる香よりも、國産の花を蒸して作った香に、楊萬里は「書生」にとつての「富貴」を感じた。蒸木屋を氣に入つたのは、木屋が楊萬里の故郷の吉水（現江西省）周邊に多く生える、いわば故郷の香りであるためであろう。辛更儒氏^{*28}によれば、この詩は淳熙五年（一一七八）春、楊萬里五十二歳、常州赴任中の作である。楊萬里は八十年の人生の過半を故郷で過ごし、外任中はしばしば故郷を想い、六十六歳時に知贛州を斷つて退休した人である。この常州で、「蓴羹鱸魚膾」を求めて職を辭すことのないよう、懐かしい木屋の香りによって、望郷の想いを静めていたのかもしれない。

楊萬里は、「過百家渡」詩四首（『全宋詩』卷二二七五）其二に次のように詠う。

莫問早行奇絶處 問ふ莫かれ 奇絶の處に早行するかと

四方八面野香來

四方八面より

野香

來たる^{*29}

「朝早くから絶景の場所にお出かけですか」と問うてくれるな。野の花の香りが四方八方から漂うこの場所が素晴らしいので、遠出する氣などないのだから、という意味である。「奇絶處」（絶景）の價値は萬人が認め、追求めるが、「野香」は日常生活にごく当たり前に存在し、人はあえて早起きしてまでは味わおうとせぬありふれた物である。楊萬里は、誰もが價値を認める物を、わざわざ追求することに意味を見いださず、日常の空間で發見した美を味わうことで満足した。「燒香七言」詩にあてはめれば、「奇絶處」が「古龍涎」に、「野香」が「蒸木犀」に相當する。楊萬里は日常のなかの美を、非日常的な美以上に愛しみ、それを自らにとつての「真富貴」として認めたのである。

五 南宋の木犀香——結びにかえて——

本稿の冒頭に舉げた楊萬里詩の、龍涎香・沈香・木犀の組み合わせは、じつはもう一例みえる。

却悔香成太清絶

却て悔ゆ

香成りて

太だ清絶なるを

龍涎生妬木犀憎

龍涎

妬を生じ

木犀

憎む

（楊萬里「和仲良分送柚花沈三首」其二『全宋詩』卷二二七五）

香りは「太だ清絶」で、龍涎香と木屋が嫉妬するほどだ、と詠う。この詩では「柚花」をくわえた合香「柚花沈」香であるから、單なる沈香以上に「清」なる香りは際立っているよう。木屋は、この詩では「負け組」に陥っているが、楊萬里がこの三種の香をしばしば取り上げていることと、古龍涎のかわりに焚いた蒸木屋を「書生真富貴」と詠じていることから、最後に木屋香を取り上げて締めくくりたい。

木屋は桂の別稱であり、長江以南に多く見られる常緑樹である。「桂」としては『楚辭』以來、登場するが、「木屋」という語は、管見では宋代になって見られるようになり、とくに南宋になって用例が急増する。南渡によって士大夫が長江以南に移動し、木屋の生育地に住むようになったためであろう。木屋といえは、有名な逸話が南宋の釋曉瑩『羅湖野錄』に見える。黃庭堅が黃龍山（江西省）の晦堂和尚を訪ね、『論語』「述而篇」の「吾無隱乎爾」（吾隠す無きのみ）の解釋を和尚に尋ねた時のこと、

時當暑退涼生、秋香滿院。晦堂乃曰、「聞木屋香乎」。公曰、「聞」。晦堂曰、「吾無隱乎爾」。公欣然領解。（『羅湖野錄』卷一）

寺院いっぱいには花の香りが満ちた。おもむろに和尚が「木屋の香りをお聞きになったか」といい、黃庭堅は「聞きました」という。和尚が、「それが『吾無隱乎爾』です」というと、黃庭堅はその解釋に感嘆した。これは木屋の香りによって哲學的命題を解説した逸話であるが、薄田泣菫が、「寺院の奥まつた一室に對座してゐる老僧と詩人との間を、煙のやうに脈々と流れて行つた木屋のかぐはしい呼吸で、その呼吸こそは、單に花樹の匂といふばかりでなく、また實に秋の高逸閑寂な心そのものより發散する香氣として、この主客二人の思を淨め、興を深めたに

相違ない」*³⁰と述べるように、木犀に世俗を超脱した香氣を嗅ぎとれてこそ成立する逸話である。

『陳氏香譜』卷一*³¹によれば、八月から九月に廬山の谷間に咲いた木犀を摘み、陰干しにして合香するとよい香りがする、という。同書の卷三には、咲き初めた花を夜明け前に採って蜜や油と混ぜ、罐に密封して地中に埋め、一月前後寝かせるなど、八種*³²の「木犀香」の合香を載せる。

管見では、木犀を詩題に掲げる詩は南宋に入って急増し、木犀の詩を数多く作った最初の人物は、周紫芝（一〇八二—一一五五）である。周紫芝は宣城（安徽省宣城）の人だが、廬山に隠棲したため、必然的に木犀を多く目にしたのであろう。さらに、周紫芝は、「木犀沈」香（蒸木犀香か？）の詩を作っている。「劉文卿焼木犀沈爲作長句」（『全宋詩』卷一五二〇）である。冒頭に、舶來の沈香と國産の木犀の花はどちらも芳香をもっていると詠い、

劉郎嗜好與衆異 劉郎 嗜好 衆と異なれり

者蜜成香出新意 蜜を煮て香を成し 新意を出だす

周紫芝は、劉さん（劉文卿）は他人とはことなる嗜好をお持ちなので、蜜を煮て木犀沈香を作り、「新意」（新しい境地）を創出された、と賞賛する。さらに、他の香料をあこれ入れずとも、木犀と沈香は本來、同じ性質（「同氣」）であるから、この二つを合わせれば融合して「一種性」となり、「香嚴」（清潔にして莊嚴）な香りを味わえるのだ、とうたう。『陳氏香譜』卷三に收録される合香「木犀香」八種の中に、これと同じ製法のものはいないので、普遍的な製法ではないのだろう。楊萬里の蒸木犀も「香嚴」な香りだったかもしれない。

劉文卿が木犀沈の「新意」を「出」だしたことは、言い方を變えれば、香の個性化である。南宋に入って木犀の詩が多作され、楊萬里に至って「書生真富貴」と、舶來の名香（を冠した合香）以上の價值を木犀の香に見いだすようになった。「龍涎香」の授受も南宋に活發になったことを併せて考えると、文人が自分に合った香を追求し、また選び取る時代になっていたのではないだろうか。

香は日常の必需品ではなく、趣味性の強い贅沢品であり、「長物」である。北宋の黃庭堅が自分には「香癖」があると詠った*³³ように、香に對する強い執着をもつ宋代文人は少なくない。とはいえ、文人の日常生活をいろどる様々な長物は、琴棋書畫や文房四寶だけではない。唐以前の文人の收集對象は室内での趣味にとどまらなかった。たとえば中晩唐の牛李の党争の領袖で知られる牛僧儒や李德裕は、それぞれ豪華な邸宅や別墅を構え、太湖石などの奇石を蘇州から多く取り寄せて庭園に配置したことで知られる。領袖の二人のみならず、同時代の白居易らも同様に貴族的で豪華な嗜好品を収集した。宋代になると様相は一變し、貴族趣味は、文人皇帝徽宗など文字通り一部の權貴のものとなった。宋代の士大夫は、三年の任期ごとに轉任を強いられるため、攜帶に不便な大型の嗜好品は諦め、攜帶可能な小型の道具、すなわち居室を飾る文房四寶などに限定されることになった。香はその文人趣味の一つであるが、龍涎香は、文人趣味と貴族趣味の合間に位置する。文人たちは、手に届かぬ希少な寶物への憧憬を、合香によって實現せんとした。その「嫵媚」なる香りに時には少々辟易しつつも、「長物」の一つとして自らの空間になじませていったのである。

* 1 劉靜敏『宋代《香譜》之研究』（文史哲出版社 二〇〇七年）、一一五頁。

* 2 北宋の黃庭堅は香を愛好したことで知られ、たとえば、早川太基「詩人の嗅覺——黃庭堅作品における「香」の表現——」（『中國文學報』第八十七冊 京都大學文學部中國語學文學研究室內中國文學會、二〇一六年四月）等の論考がある。

* 3 山田憲太郎『東亞香料史研究』（一九七六年二月、中央公論美術出版）、二七六頁。

* 4 注3の山田憲太郎氏著書、一八七頁。

* 5 『鉄圍山叢談』卷五（唐宋史料筆記叢刊 中華書局 一九九七年）

* 6 北宋の丁謂「天香傳」に、「以沈香爲宗」という。

* 7 「遂絶意仕途、終身隱居」（『臨川縣志』卷四十三）

* 8 謝逸「以水沈香寄呂居仁戲作六言二首」（『全宋詩』卷一三〇七）

* 9 注3の山田憲太郎氏著書、二七七頁。

* 10 注3の山田憲太郎氏著書、二六七頁。

* 11 全文は以下の通りである。「大食西海多龍、枕石一睡、涎沫浮水、積而能堅。蛟人探之以爲至寶。新者色白、稍久則紫、甚久則黑。因至番禺嘗見之、不薰不瀝、似浮石而輕也。人云龍涎有異香、或云龍涎氣腥能發衆香、皆非也。龍涎於香本無損益、但能聚烟耳。和香而用眞龍涎、焚之一鉢、翠烟浮空、結而不散、座客可用一翦分烟縷。此其所以然者、蜃氣樓臺之餘烈也」。

* 12 「香門」には沈水香・蓬萊香・鷓鴣斑香・箋香・衆香（光香・沈香・排草香・橄欖香・欽香・零陵香・蕃梔子）を収録する。

* 13 顏持約『香史』、丁謂『天香傳』、洪芻『香賦』、沈立『香賦』、葉庭珪『南蕃香錄』など。

* 14 注1の劉靜敏氏著書（一一一頁）は潜齋の『香譜拾遺』とするが、詳細は不明である。

- * 15 溫子皮については、劉靜敏『「陳氏香譜」版本考述』（臺灣『逢甲人文社會學報』第十三期、六十三頁）も未詳とする。
- * 16 注3の山田憲太郎氏著書、一七五頁。
- * 17 范成大『桂海虞衡志』「志香」に、「大抵海南香氣皆清淑、如蓮花・梅英・鶯梨・蜜脾之類、焚一博投許氛翳彌室。翻之四面悉香、至煤燼氣亦不焦、此海南香之辨也。」といい、陳敬『陳氏香譜』卷一「沈水香」條に「水沈、出南海、凡數重、外爲斷白、次爲棧、中爲沈。今嶺南岩高峻處亦有之、但不及海南者香氣清婉耳」といい、『諸蕃志』卷下「沈香」條に「海南亦產沈香、其氣清而長、謂之蓬萊沈。」という。
- * 18 蘇軾「沈香山子賦」（『蘇軾文集』卷一）に、「獨沈水爲近正、可以配薝蔔而並云。」という。
- * 19 陳敬著、嚴小青編著『新纂香譜』（中華書局、二〇一五年）
- * 20 注3の山田憲太郎氏著書、一七五頁。
- * 21 宮崎市定「中國における奢侈の変遷——羨不足論——」（『中國文明論集』岩波文庫、一九九五年第一刷）
- * 22 内訳は、内府龍涎香、王將明太宰龍涎香、楊古老龍涎香、亞里木吃蘭脾龍涎香、龍涎香、龍涎香、龍涎香、龍涎香、龍涎香、南蕃龍涎香、龍涎香、龍涎香、龍涎香、智月龍涎香、龍涎香、龍涎香、古龍涎香、古龍涎香、古龍涎香、白龍涎香、小龍涎香、小龍涎香、小龍涎香、小龍涎香、の全二十四種である。
- * 23 このほかに、「偽品」の龍涎香もあったようだ。山田憲太郎氏は、「タールというアンバルを呑みこむ大魚の、腹部の中」の *mund* と呼ばれる部分が、アンバルを珍重するアラビヤ人に出回っていたと指摘する（前掲書二七五頁）。中國にそれが流通した可能性も否定できないが、本稿ではその判別は措くこととする。
- * 24 木犀香など、花の香は例外である。
- * 25 王洋の「龍涎香」詩（『全宋詩』卷一六九〇）は授受の詩ではなく、詠物詩である。「未參南海素馨仙」と、龍涎香の香りを「參」じたことがないと表明しているため、想像で詠んだ詩の可能性もある。
- * 26 『宋會要輯稿』第八六冊（國立北平圖書館、上海大東書局、民國二五年影印）

- * 27 『山家清供』下卷にみえる。原文は次の通りである。「又有採花略蒸、曝乾作香者、吟邊酒裏、以古鼎燃之、尤有清意。童用師禹詩云、『膽瓶清氣撩詩興、古鼎餘葩暈酒香』、可謂此花之趣也。」（林洪撰、章原編著、中華書局、二〇一三年）
- * 28 辛更儒箋校『楊萬里集箋校』（中華書局 二〇〇七年）による。
- * 29 訓讀は、『宋詩選注』（錢鍾書著、宋代詩文研究會 訳注、全四冊、平凡社東洋文庫、二〇〇四年）に拠った。
- * 30 薄田泣菫「木犀の香」（『薄田泣菫全集』第五卷 創元社 一九三九年）
- * 31 「木犀香」に、「『向余異苑圖』云、『岩桂、一名七里香、生匡廬諸山谷間。八九月開花、如棗花、香滿岩谷。採花陰乾以合香、甚奇。其木堅韌、可作茶品、紋如犀角、故號木犀。』」という。
- * 32 内訳は、吳彥莊木犀香、智月木犀香、木犀香、木犀香、木犀香、木犀香、桂花香、の全八種である。
- * 33 黃庭堅「賈天錫惠寶薰乞詩予以兵衛森畫戟燕寢凝清香十字作詩報之」其五『全宋詩』卷九八三。